

3.11 基礎自治体による外国人住民安否確認と生活復興支援

第四章 気仙沼市からの報告

東日本大震災では、巨大津波により多くの命が奪われた。気仙沼市の死者・行方不明者の数は平成26年3月現在1,431人を数え、石巻市の3,957人に次ぐ大惨事となった。

巨大津波に襲われた自治体はいずれも被災状況の把握に追われることとなったのだが、なかでも人的被害確認の作業において「日本人」、「外国人」を区別して行うことはほぼ不可能な状況であったといっただろう。理由としては、行政機能が未曾有の大混乱に陥ったことに加え、外国人住民に関しては「個人情報保護法」という壁のために住民基本台帳を管理する課と国際担当課との間の情報共有を図ることができなかったためである。その結果、各国大使館も自国民の安否確認には困難を来したことは想像に難くない。このような中、気仙沼市は市長の「外国人(の安否確認)はどうなっているのか?」という一言で、国際担当課による外国人住民に特化した被害確認が行われた。水産業を基幹産業とする気仙沼ならではの首長の一言だったのかもしれない。

当時、気仙沼には16か国462人の外国人が住民登録されていた。その約半数が技能実習・研修・特定活動といった立場の外国人であり、多くが水産業に携わっていた。幸いなことにこのような外国人については、事業所単位での安否確認が可能とされた。

一方、それ以外の国際結婚などで来日されている方々については、個人情報保護法という厚い壁があるなか、どのような手段で安否確認を行ったのか。そして、その後どのような生活復興支援を行ってきたのか。その記録を辿ってみたい。

気仙沼市における外国人住民の安否確認および生活復興支援活動

◆記録者／気仙沼市地域づくり推進課内 気仙沼市小さな国際大使館国際交流員 村上 伸子氏

期 間：2011(H23)年4月～

活動内容：在住外国人の安否確認①(震災後の早い段階:行政業務の混乱期)

*震災後の混乱期に対処可能な手段での安否確認

- ・市内の避難所において、避難所担当の市職員が目視、接触によって被災した外国人の存在を認識したとの情報があつた。
- ・外国人被災者自身の市役所への来訪、電話の問い合わせによって当事者の無事(被災状況)が確認できた。
- ・震災の被害が少なかった日本人の市民(日本語教室や国際交流活動の関係者)による安否確認がなされた。市からの依頼による場合と、個人が任意で行う場合があつた。

期 間：2011(H23)年5月～6月

活動内容：在住外国人の安否確認②(震災の数ヶ月後:行政業務の正常化への移行期)

*まちづくり推進課(震災当時の課の名称)主導による在住外国人の安否確認の開始

- ・市内の行政委員(区長のような世話役)に、市から地区内の住民の安否確認を依頼し、担当者が戸別訪問、あるいは電話や口頭での問い合わせで得た情報を市に知らせてもらう中で、在住外国人の情報も得た。それでも安否が不明の場合(平成24年の法改正以前のため、住民基本台帳に在住外国人の記載がなかった)、その外国人の近隣住民や知人に、最近の様子や所在を尋ねるなどの作業を行った。
- ・市役所に連絡を寄せた外国人被災者を訪ねて、避難所に足を運んだ。
- ・市の水産や商業などの関係課から在住外国人を雇用している企業の連絡先を聞き、電話で状況を尋ねた。
- ・まちづくり推進課内での使用に限定するという条件で、市民課(住基担当課)から譲りうけた在住外国人名簿のコピーを元に、住宅地図で住所を探し、該当する住宅を所有する家族や企業に個別に電話をかけるなどして情報収集に当たった。
- ・ある国籍に関しては、同国人グループのまとめ役が同胞の安否を名簿にしたものを作成しており、そこから情報を得た。別の国籍グループには、同じような名簿の作成を依頼した。

期 間：2011(H23)年6月～2012年(H24)3月／2012(H23)年7月～2013年(H24)1月

活動内容：外国籍女性被災者への就労支援プロジェクト

- ・2011(H23)年6月から翌年の3月まで、東京に拠点を置く認定NPO法人難民支援協会との協働で被災した外国人女性にホームヘルパー2級の資格を取得させる支援プロジェクトを実施した。
- ・気仙沼小さな国際大使館が提供できる資源を活用し、日本語学習とヘルパー養成講座における支援を行った。
(補助講師や会場の手配、授業の教案の作成や教材の提供と活用、受講生や補助講師、NPOとの連絡作業などが含まれる。)
- ・2014(H23)年7月から翌年の1月までは、日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう!プロジェクト」との協働で、外国人女性のホームヘルパー2級取得の支援プロジェクトを実施した。

期 間：2012(H24)年9月～現在

活動内容：「外国人ネットワーク」

- ・東日本大震災後、在住外国人の安否確認に時間と手間を要したことを教訓に、市内在住の外国人との連絡網を整備することになった。在住外国人に任意の上でネットワーク登録してもらい、各人の住所や電話番号などの情報を含む名簿を作成した。緊急の場合に活用するほか、市とのより密な交流や生活相談を促進するために利用する。
- ・2013年12月13日、「外国人ネットワークの集い」(第1回)の中で、料理会と市警察指導の安全な生活のための研修会を開催した。

期 間：2011(H23)年10月～現在

活動内容：日本語教室の定期開催

- ・日本語学習の場の提供が、人と人を結びつける側面を持つ外国人支援であるとの認識に基づき、在住外国人が定期的集まり、学習のみならず、個人的な交流や人間関係の構築ができる機会を設ける。市民の任意団体「日本語教室はまろう会」の協力を得て、年に四期の日本語教室開催を目指している。

【東日本大震災を経て得られた教訓や課題】

外国人が日本で生活する中で、どうしても周りの人々の助けがなくてはならない場合がある。先の震災後、在住外国人の安否確認には行政の主導が、避難所やその後の暮らしに大切な情報を得たり手続きをしたりするには日本人の言語補助が、資格取得の勉強には、ある程度のお膳立てと後押しが必要であった。外国人の「要支援」という面が、時折浮上するというわけである。

しかし、だからと言って、彼ら、彼女らは、決して「外国人だから災害弱者」なのではない。避難所でも仮設住宅でも、外国人が日本人より多くの問題を抱え、より多大な支援を受けているという事例は、驚くほど聞こ

えてこなかった。日本人も外国人も自然の脅威に抗う術を持たない同じ人間であり、被災者が国籍で線引きされることはないのだ。

気仙沼地域の外国人被災者の多くは、日本人の家族を持つ女性たちである。震災後の困難な時期、彼女たちは、避難所においても自宅においても、義父母、夫、子供たちを助け、支える頼もしい存在であった。また、上記の支援活動の報告に挙げたように、複数の外国人がホームヘルパー2級の資格を取得し、その後地域の介護施設に就職を果たしている。とすれば、「要支援者」、「弱者」という目を向けられがちな彼女たちが、今や会社や地域社会に貢献する存在となっている。

もう一つの事例に言及しよう。3年前の震災は、在住外国人に、いわゆる「自助努力」の必要性を痛切に感じさせる体験ともなった。自分たちの身を守り、生活を向上させるために、日本語を含む様々な能力を自らが努力して習得しなければという言葉が、震災後によく見られるようになった感がある。

この変化に、共に震災を生き延び、精神的、経済的な苦痛を共有した者同士の連帯感が相まって、日本人と在住外国人が、今後何らかの形で地域の多文化共生、ひいては復興の推進に共に寄与できないものか。地域の人々に、在住外国人をもっと理解し、共感してもらうことで多国籍の協働が実現するところに、私たちの町の未来があると信じたい。

1 はじめに：地域の外国人の「セーフティネット」となっていた日本語教室

現在、宮城県内には20を超える日本語教室が設置されており、その地域に暮らす外国人にとって貴重な日本語習得の場、交流の場などとなっている。公民館等の公的施設を会場として、週に1~2回開催されている教室が多く、自治体が主催したり会場確保の便宜を図ったりと、何らかの形で公的支援を得ているところが多いが、実際に教室運営を行っているのは、その地域の市民ボランティアである。

東日本大震災では沿岸部が津波による甚大な被害を受けたが、この沿岸部の市町の多くに日本語教室が存在し、その関係者たちが地域の外国人の安否確認やその後の支援などに大きな力を発揮した。私たち宮城県国際化協会による被災外国人支援事業の実施にあたっては、日本語教室の方々にも多大な協力をいただいた。

こうしたことを経験して私たちが気付かされたのは、日本語教室とは、大規模災害のような非常時に、その地域に暮らす外国人の大きな助け・拠り所となる、言わば「セーフティネット」となる存在であるということである。そこで本章では、沿岸地域にある4つの日本語教室の関係者に震災後の取り組みについて振り返っていただき、具体的に日本語教室がどのように外国人にとって「セーフティネット」となっていたのかを紹介する。また、そこから見えてくる、防災・減災のための地域づくりと日本語教室の関係についても考えてみたい。

2 沿岸被災地における日本語教室の実践：4地域の日本語教室関係者へのインタビュー

2-1

在住外国人の安否確認と生活復興のための個別サポート：国際サークル友好21 清水孝夫さん

震災直後は、まず石巻市と友好都市関係にあった中国・温州市からの技能実習生の安否確認に奔走されたんですね。

そうです。温州市人民政府から石巻市内の水産加工場で働いている実習生29人が行方不明になっているという連絡が入ったので、市役所に相談して、市の職員や商工会議所の担当者と一緒に行方を捜しました。瓦礫の山と浸水で泥だらけになった道をどうにか宿舎に行ってみたのですが、人気がない状態でした。その後、避難所となっていた学校やお寺にいたことがわかり、市役所に集合させて、仙台空港が使用不能なため、石巻市がバスで新潟空港経由で中国に帰国させました。

日本語教室の支援者や受講生の安否確認をされたのは、その次のことだったのでしょうか。

電話が通じてからのことなので、発災後2、3週間経った頃だったと記憶しています。託児ボランティアの人と偶然出会って無事を喜び合ったのですが、「そういえば他の先生方はどうしているだろう」という話になって、連絡を取りました。それから先生方から学習者にも電話をしてもらって、その結果、先生方も学習者も幸い

命は無事だったということがわかりました。ただ、先生方も学習者も半数以上の方が被災していて、学習者の中には家族を亡くされたという大変辛い目に遭っている人もいたということがわかりました。

私たちが石巻を尋ねて、市内の避難所に同行していただいたのは、その後のことですね。まだ道路が寸断されていて混乱していたなか、道案内をしていただいたり、被災外国人の情報を教えていただいたり、本当に助かりました。

MIAの人たちが来なかったら、避難所に行こうなどとは考えなかったかもしれないですね。一緒に避難所を周っていて、これはなんとかしなければ、という気持ちになりました。

避難所の中にご主人を亡くされた元学習者がいたのですが、自宅に津波が押し寄せてきて、自分は二階にやっと逃げてなんとか助かったが、逃げ遅れた病弱の夫を二階に引き上げたようにしたけど、どうにもならず、力尽きて溺死させてしまった…と泣きながら話をされたときは…もう何も言えませんでした。

そうした被災外国人を個別にサポートされていたということですが、そのお話を少しお聞かせください。

自宅が津波で流されてしまった人は、パスポートや外国人登録証も何も一切ないという状態で、まず、自分を証明するものと罹災証明を取る必要がありました。それが無いことには前に進まないで、まずはその申請を手伝いました。最初に市役所に相談したら、自宅を流失したことを証明するのに、「被災した家の写真を持ってきなさい」と言われて、海水が残る中を一緒に苦労して写真を撮ってきたら、「要らなくなりました」とのことで、「なんだ、それは」と思いましたが、何千人という被災者がいるのだから、簡素化しないと仕方なかったんでしょうね。

申請をするために朝5時に起きて市役所の行列に並ぶのですが、順番が回ってきて手続きができるのは夕方なのです。それでも並んで待つしかない。やっと順番が来て、書類に名前と住所を書かないといけないのですが、Aさんは自分で書けなかったので、待っている間に紙に何度も書いて練習させたり、ということもありました。罹災証明をもらって、別の日に預金通帳の再発行のために銀行にまた並んだら、我々の数メートル前でその日の手続きは打ち切られたこともありましたが、それから、義援金・見舞金の申請、仮設住宅の申込み、引っ越しの手伝いなどもしました。相手が女性だったので、私一人ではいろいろ問題になるかと思い、同じ出身国の学習者に同行してもらうなど気を遣いました。

私たちMIAから石巻の被災外国人のサポートをお願いしたこともありましたよね。

はい。夫と義理のお父さんを亡くされて、市内の避難所で暮らしている女性の話を聞いて、その避難所に尋ねて行ってみると、私たちの日本語教室の元学習者でした。ただでさえ大変なのに、幼児3人を抱え、しかも妊娠中だということで苦労されているようでした。ただ、とても気丈な方で、「何かあったらお手伝いするからね」を声を掛けたところ「大丈夫ですよ」と答えて頑張っていました。市役所の保健担当課とMIAに相談して、最終的に母子施設に入ることになったんですね。

第四章

それから、ご主人が仕事中に津波に流されて亡くなった方で、夫の両親が預金通帳などの資産を押さえているので困っているという話を聞いて、私からMIAに相談しました。MIAから弁護士を紹介してもらって、私も相談に立ち会いました。その弁護士の方からは更に社会保険労務士を紹介してもらい、その方のアドバイスを基に労働基準監督署に労災保険の手続きにも同行しました。結果、貯金通帳もその方のもとに戻って労災保険も下りて、とても助かりました。

地元でいろいろと動いてくれる清水さんがいたからこそ、ああいった支援が出来たのだと思います。

いえいえ、そんなことはないと思いますよ。ただ、あのような支援をしたことが、のちの私たちの会の活動にプラスになった、ということはあったかと思えます。「国際サークル友好21」の教室で日本語が勉強できる」とか、「あそこの会に参加していると、何かあったときに助けてもらえる」など、特にフィリピンの人たちの間で国際サークル友好21のことがより広く知れ渡ったようです。イベントへの参加者も増えるなど、広がりが出ました。

次に、休止していた日本語教室の再開のことについて教えていただけますか。

MIAが6月に石巻で開催した「東日本大震災を振り返る会」で、初めて多くの学習者、講師が一堂に会して、いろいろな方の具体的な被災状況があつた場わかりました。あのときは、涙、涙でした。皆で辛い体験を語り合っ、話を聞くのがやっとという感じでした。そのときに「早く教室を再開してほしい。またみんなと集まりたい。」と学習者に言われたのです。他の先生方にもそういう声が寄せられたそうです。その先生方からも「今日来ていない人はどうしているんだろう、会いたいね」という声が出て、「どんな形でもいいから、早く再開しよう」という話になり、それから場所をそっちこっち探しました。震災前に教室として使っていた中央公民館はまだ避難所になっていましたから。

そうしたところ、駅前の観光協会の会議室を借りられることになって、とりあえずそこで教室を再開しました。学習者は12、3人だったでしょうか。教材も備品もなかったもので、その時にあるものを取り敢えず活用しました。それからMIAや他県の団体からの支援金を活用して、少しずつ教材を整備していきました。被災した学習者や先生方には教材を無償で提供しました。震災翌年の2月頃からは元の中央公民館に戻って活動しています。

震災前後で日本語教室や国際サークル友好21の取組に何か変化はありますか。

生活環境が変わって、なかなか教室に来られなくなったという人がいる一方、日本語、特に漢字をしっかり勉強しなければ、という意識になった人もいます。仕事を得るために、パソコンの能力を身に付けたり、日本語能力試験のN1、N2を取りたい、それで漢字を学びたいという声が上がりました。嬉しい変化は、市が日本語教室にとっても協力的になったことでしょうか。コピー代を無料にしてくれたり、在住外国人が講師となって世界の家庭料理教室を公民館と共催でやったり、とても有難いことです。

それから、防災の取組ですが、今迄の考え方とは異なった防災研修をやる必要があるだろうと思って市の市民協働課に相談したところ、MIAで出前型の研修をやっているということで、それを協働で実施しました。消防署に交渉して、会場提供や講師派遣という形の協力を得ました。ただ、講義内容はもう少し考えたほうがいいかな、もっと訓練的な要素を入れたほうがいいのでは、と思っています。また、次回実施するときは、町内会や民生委員を巻き込みたいですね。それぞれの組織に知り合いがいて、声をかけてはいるのですが、残念ながら反応は良くないです。近所に住んでいる人の意識が変わって、何かあった時にその人たちが対応できるようにするというのがいいのですが。

震災後から今までの清水さん始め「国際サークル友好21」の取組を振り返って、どのようなことを感じていますか。

無我夢中でした。MIAの人たちと一緒に行動出来て良かったです。でも、もっと頑張れたかなあ。もっと避難所を周ればよかった、あんなことも、こんなことも出来たんじゃないかなあ、と後になって思います。

また、今、強く感じているのは、出身国別にリーダーを育成することが必要だということです。私がいつでも連絡を取れる人が100人前後、会の活動に積極的に参加してくれる人が3~40人いるのですが、その中で、また次に何かあった時に、そのリーダーを中心としていつでも連絡がとれるような体制を作っておくことが必要だと思います。

清水さんは「人を育てる」という意識がとても強いですね。

そうですね。日本語を身に付けるだけでなく、その人の能力を地域に活かしてもらうという意識は、国際サークル友好21の立ち上げ当初からありました。だって、せっかく勉強して、その後、何もせずにいたら勿体ないでしょう。どこかの研修で耳にしたのですが、そこに暮らす外国人を「地域の宝」として、能力を磨いて社会貢献できるようにしてもらわないと、いつまでたってもお客さん扱いで終わってしまうでしょう。

そのように「育った」人たちが、今回の震災後に周囲の人を支援する側に回ったり、そして、これは震災前からのことですが、市の外国人窓口相談員、外国出身の子どもの学習支援員、英語の補助教員として活躍していますね。

そうですね。でも、まだちょっと物足りないかな。活用する市の側も、もっと勉強してもらおう機会を作って、本人たちに自覚を持たせてほしいし、待遇も活動に見合ったものに改善してほしいですね。それから、外国人側も、自分の立場は置いておいて人を助けるという側に回ってくれればいいのだけれど、文化や価値観の違いがあって、なかなか中立的に関わるのが難しいという場合もあるようです。ただ、ここ数年は、先ほどお話しした出身国ごとにリーダー的な存在の人が出て来ていて、頼もしく思っています。

今後の「国際サークル友好21」の活動については、どのようにお考えでしょうか。

もっと組織力を強化したいと考えています。例えばNPO法人化するなどして、公的に動けるような組織にしたいのです。まず、会の運営を託す人材を育てたいと思っていますが、なかなかそれも難しいですね。

日本語教室の先生方は、手当も交通費も支給されていないので、そこは何とかしたいのですが、現状では残念ながら解決しようがないです。それぞれ、こうした活動に関心があったり、自分も海外経験があって、その際に助けられたことの恩返しにということで協力してくれて、よく頑張っていたいので、皆さんにはいつも感謝しています。この待遇の問題も組織がきちんとしていれば、もう少し改善できるのではないかと思います。多文化共生の地域作りのためには、いろんな機関が連携していかないとけないですから、そのためにも、人材を育てて国際サークル友好21という団体をもっときちんとした組織にしたいと考えています。

2-2

津波被災地での日本語教室の立ち上げ：南三陸町日本語教室 佐藤金枝さん(台湾出身)

まず、震災前の南三陸町の日本語教室の様子について教えていただけますか。

もともと公民館の事業の一環として日本語教室を開いていたのですが、学習者の数に対して講師の数が少なかったこともあって、一時的に休止していました。それで、町やMIAの協力を得て、講師養成のための講座を開こうと準備をしていたのですが、そこで東日本大震災が起きてしまいました。

金枝さんご自身も被災されたんですね。

私はMIA主催の研修会に参加していたので、直接は津波の被害に遭わずに済んだんです。南三陸町に帰るまでは大変で、道の駅の駐車場で友達と車中で一晩過ごし、翌日初めて町の変わり果てた様子を見たとすけど、悲しいというより、どうしてこういう災難に遭わなければいけないんだろうと呆然としました。

自宅は流失してしまったので、避難所に入って、それから仮設住宅で2年間暮らして、その後、住宅をリフォームして地元に戻りました。避難生活の間は、地域の人たちによくしてもらったし、そんなに寂しいと感じたことはなかったのですが、これからどうしよう、前に進めないという思いと、毎日の生活に対する不安、それから、復興の遅れに対する歯がゆさというのを感じていました。今の生活に戻るまでは、毎日が戦争のようでしたね。

そうした大変な生活のなかで、日本語教室を再開しようと思ったのは、どうしてなのでしょう。

避難所で生活していたころ、公民館の日本語教室の学習者が私のことを心配して尋ねてきてくれて、いろいろな話をして、とても慰められたのですが、その中で来日間もない人が「もう日本語を勉強できないんです

ね」と言っていて…。そのひと言を聞いて、生活していく以上、言葉は必要なものだし、自分に求められていることがあって、それに応えられるんだったら、やらなくては、と強く思いました。

私の経験からも、言葉を学ぶ場が必要だと思っていたんですね。避難所でさまざまなニュースが流れていて、それから壁にはいろいろな情報が貼り出されていて、私はある程度日本語能力はあるのですが、それらをきちんと理解するのは難しかったです。やはり言葉というのは大切だな、私自身ももっと勉強していればよかった、と感じていました。また、ある学習者は夫を亡くしてしまい、その方が一人で役所に出向いてさまざまな手続きをしたり、書類を読み書きしたりするのにとても苦勞をしているのも見ていました。ああいう状況に追い込まれると、さまざまな情報を消化して理解するため、日常生活以上の言葉の能力が求められるんですね。

それから、日本語教室というのは、唯一、学習者が地元で顔を合わせて、情報交換したり、問題を解決したり、ほっと一息つける貴重な場所だったんです。だから、町に日本語教室はやはり必要だ、なんとか再開したいとは思ってはいたのですが、残念ながら現実的には何もできないという状況でした。

そうしたところ、町役場の国際交流担当部署の方から連絡が入ったんですね。

はい。養成講座の準備をされていた方が津波の被害に遭ってお亡くなりになってしまったのですが、その後任のUさんからでした。「前任の方の仕事ぶりを見ていた。その方のやり残したことを自分が引き継いで形にしたいので、震災前に準備をしていた養成講座を開いて、日本語教室を再開しよう」ということでした。被災した後だったのに、町の事業の一環として日本語教室のことを考えてくれたのだなと思って、すごく嬉しかったです。

そこからMIAと町との協働で動き始めて、震災のあったその年にボランティアの養成講座を実施したのですが、正直に言いまして、当時は私たちもこの時期にこの講座を行っていいのだろうか、という思いもありました。

そうですね。始めようっていう気持ちで、わくわくはするんですけど、反面、本当にやっていいのかな、それから、参加者はいるのかなという心配もありました。でも、結果的に11人も人が集まってくれて、ほっとしました。その中には大変な思いをした方もいらしたのに、皆さん自分のことよりも人のために何かをしたいという思いを持ってくださっていました。いろんな方の「役に立ちたい。応援したい」という気持ちが目に見えるようで、とても嬉しかったです。迷いはあったのですが、やって良かった、と思いましたね。

養成講座が終わって、そこから日本語教室の再開までいろいろと準備の作業をされたんですね。

修了した方はみなさん未経験者で、とても不安だったのですが、さまざまな工夫をして、役割分担をしてそれぞれができることをやろう、ということになりました。学習者のニーズを把握するためにアンケートを取って、それでまず一歩を踏み出したという感じですね。

再開した教室の開講日はどのような気持ちで迎えましたか。

すごく緊張していました。準備不足なんじゃないか、学習者は来るのだろうか、先生たちも家の用事があったり急に来られなくなるんじゃないかと、いろいろな心配がありました。でも実際にはたくさん人が来てくれて、順調に初日の活動を終わることができて、一安心しました。学習者の期待みたいなものも感じましたね。ここで生活していく以上、言葉は必ず必要になるので、そういう環境を町が提供してくれることになって、本当に良かったと思いました。

学習者からはどんな声が聞こえてきましたか。

二回目の教室のあとだったと思うのですが、「楽しい!また来ます!」「なんで週に一回の二時間だけなんですか」という感想や「来週は来れないから宿題ください」と言われたりして、すごく嬉しかったです。

金枝さんが言っていた「みんなが集ってほっと一息つける場所」になりましたか。

はい。やっぱり学習者が集まる場所って、他にないんですね。震災のあとはスーパーもなくなったので、町でばったり会うこともなくなっていました。みんなで集まって、情報交換したり、いろいろ意見を言い合ったりする場所って、日本語教室しかないんですね。去年の後半なんかは、みんなで集まっておしゃべりしている時間が多かったぐらいです。勉強もしていましたけど、町の復興のこととかについて、あれこれ情報交換することが中心になっていました。

日本語教室は、私自身にとっても、いい息抜きの場所だったんです。やっぱり震災後の毎日の生活は大変で、いろいろな悩みを抱えているなかで、教室に来るとまったく違うことに集中できるし、他の人と話していると自分とは違う視点で物事を考えることができるし、私自身が教室の存在に助けてもらったという面があるので、感謝しています。

先生方のチームワークもよかったですよね。

はい、それぞれ出来ることから始めて、でも毎回活動の前は打ち合わせと反省会をして、お互いにアドバイスをしあったりして、次の活動につなげるということをしていました。みんな本当に熱意があってパワフルで、とても一生懸命でした。それから、役場のUさんの存在も大きかったですね。いろいろな連絡や調整をいつもしてくれたり、毎回教室にも参加して、明るい雰囲気や教室を盛りたててくれました。私たちの大きな力になってくれています。

日本語教室から派生した「サークル活動」について教えてください。

「サークル活動」は、学習者のうち、日本での滞在歴が長い中国出身の配偶者がメンバーになって、日本語教室とは別に活動しているものです。あるとき、中国語で南三陸町のガイドが出来る人はいないか、という話があって、それで、そうした活動ができるようになろう、ということで始まりました。町の観光協会が震災の体験を伝える「語り部ガイド」の活動をしているのですが、それが中国語でできたらいいんじゃないかな、と思っています。

これまで具体的にどんな取り組みをしてきたのでしょうか。

勉強会を何度か開いて、志津川の地理や歴史、それから被災状況やそれを伝える技術などについて、講師を招いて勉強してきました。それから、町の観光協会からは、震災の様子を伝えるパネルの紹介文を中国語に翻訳してほしいと頼まれていて、みんなで集まって訳文を検討して、翻訳作業そのものは終わっています。この活動を通して、皆、地元のことを深く学ぶことができるので、とても嬉しく思っています。それまでこういう研修の機会はありませんでしたから。この「サークル活動」自体も、日本語の勉強にもなっていると思います。

とても意味のある活動ですね。中国語での語り部ガイド、実現するといいですね。

まだ勉強している段階で、皆、主婦で忙しくて、なかなかすぐにというわけにはいかないので、少しずつ前に進めたら、と思っています。

2-3

学習者の自宅での移動日本語教室の開催：日本語講座いわぬまアイビー 川村智子さん

震災直後に「日本語講座いわぬまアイビー」の方々がどのような活動をしていたか教えてください。

毎年開催していた日本語スピーチコンテストが終わった次の週でした。修了式、お別れパーティーをする予定だったところに震災が起きて、当時五人いた講師とも連絡がとれなくなりました。4、5日経って電話が通じるようになってから、手分けして学習者に連絡して安否を確認して、被害に遭った人はいるけど、亡くなったり怪我をしたりした人はいないということがわかりました。

第四章

自分から連絡をくれた学習者もいたのですが、韓国人のグループから電話をもらって、「領事館の手配でバスに向かって新潟空港に向かうところです。日本に戻ってこられるかどうかわからない。先生さようなら」と言われたこともありました。韓国出身の人たちは、普段から仲が良かったということもあってよく情報交換していて、「○○さんは△△さんのところにいる」ということを、時には韓国からの国際電話で伝えてくれたりもしました。被害が少なかった人の自宅に学習者が4人ぐらい身を寄せていたということもあったようです。

日本語教室はしばらく休まざるを得なくなったんですね。

はい。あのような状況で日本語教室のことは考えられなくなったし、自分たちの生活のこともあったものですから、休止せざるを得ませんでした。岩沼市で被災者支援のためのセンターを立ち上げていたので、講師はそれぞれ支援物資の整理などのボランティア活動をしばらくしていました。2カ月ぐらい経った時に、韓国に一時帰国して戻ってきた学習者に「もう日本語教室は始まった?」と聞かれたんです。私は「始まるものにも、公民館はずっと避難所になっているから教室は開けないよ」と答えたんですが、「先生、みんな日本語教室に行きたいって言うてるよ。○○さんも△△さんも言うてるよ」と言われて…。でも、市役所の担当の方は食料の配給とか亡くなった方の情報の整理とかで本当に忙しくしていました。とても日本語教室のことやその会場のことを言いだせる状況じゃなかったで、「日本語教室はまた落ち着いたらね」と答えるしかありませんでした。

それでその学習者は納得されたのでしょうか。

いいえ。やっぱり不安で落ち着かなかったのだと思います。「みんなに会いたい。場所なんて、どうにでもするから。先生、私の家でやろう!」と言ってきたんです。ちょっと驚いたんですが、「週に1回、もしかしたら月に2回になるかもしれないけど、それでもいいなら」と返事をして、学習者の家で日本語を教えることになりました。ただ当時はまだガソリンが不足していて、車での移動というのは困難だったんですね。だから、これは他の講師には頼むことはできませんでした。幸い私は夫の仕事の関係で比較的ガソリンの都合が良かったので、自分一人で始めることにしました。

初めての移動教室のときはどんな様子でしたか。

もう、「会えて良かったね」と中国、韓国の方々と嬉しくて抱き合いましたね。いろいろ話しているうちに、最初に言いだした人の家ばかりじゃ申し訳ないということで、次は誰の家、その次は誰の家と順番を決めていたのですが、「先生の家にも行きたい」とみんなが言って、私の家もその順番の中に入ることになりました。このような形で5月の連休明けぐらいから教室を全部で6回開きました。

移動教室ではどんなことをしていたのですか。

いつも2時間ぐらい勉強して、あとはみんなで持ち寄った食材でご飯を作って食べるということもしていましたね。他の学習者の状況について情報交換もしていました。それから、学習者が教会で配布されていたという支援物資を持ってきたので、それを私がもらったり、もらいきれないものは市の支援センターに持って行こう、という相談をしたりしていました。

学習者が支援物資を提供していたんですね。

はい。韓国の方は教会が用意した支援物資の届け先を探していて、私が市役所につないで水や食料を寄付してもらったこともありました。韓国の方は、帰国しないで教会のお手伝いで熱心に支援活動をしていた人もいて、偉いなと思いました。

岩沼市外の学習者の方もいるようですから、移動するというのは大変ではなかったですか。

はい、駐車場が広いということで、S市に住んでいる学習者の家で開催することが多かったのですが、そこまではけっこう車でも時間がかかりましたね。でも、それぞれの家庭環境がわかってたりして、学習者の自宅を訪問するというのは、それはそれで興味深いものでした。

出張教室のあとは、どうされたのでしょうか。

市役所の担当の方から、「中央公民館はまだ使用不可だけど、西公民館の調理室なら使えるよ」という話を聞いて、「調理室でもどこでもいいですから是非使わせてください」と返事をして、他の講師3人も加わって、その公民館に場所を移して教室を開きました。調理室での活動というのも楽しかったですよ。せっかく調理室を使えるのだから、皆で料理をしようということで、韓国の人が中心になって、わざわざ国から材料を調達してチゲやチジミを作って食べたこともありました。冷蔵庫があったので、誰かがアイスクリームを差し入れたりして、皆でワイワイ楽しく過ごしていましたね。もちろん日本語の勉強もしていましたよ。調理台が机代わりだったので、なるべく教科書は使わないようにするなど工夫していました。

9月ごろに元の中央公民館に戻ったんですね。

はい。市役所の担当職員の方が会場確保のためにすごく頑張ってくれました。「こんな大変な環境の中でも日本がいいって住み続けてくれる人たちなんだから、なんとかしなくてはね」と言ってくれて、とても感動したことを憶えています。二部屋しかなかったので、託児と勉強の部屋が一緒になるような形ではあったのですが、9月から日程を組んで、震災前と同じように再開することができました。

第四章

再開したことをどこかで聞いて、次第に学習者が集まるようになって、最終的には十数人になりました。

再開するのを皆さん待っていたのでしょうかね。

そうですね。中央公民館に戻ってからも、最初のころは、コーヒーを飲んでほっとして、みんなで顔を合わせて「良かったね、楽しいね」と談笑していました。震災という大変な経験をして、通常とは大きく変わってしまった環境の中で、毎週木曜日に日本語教室がある、普段と同じことができるということで、「ああ、日常に戻れたんだな」という思いもあったのではないのでしょうか。それから、教室に来れば知り合いの安否などの情報が手に入る、ということがあったようです。それまで全然消息がわからなかった友人の情報を探して来たという人もいましたね。あとは、震災前からそうだったんですが、楽しく賑やかに過ごすことを心がけました。勉強の時間はきちんと設けますけど、あとは皆で自由にワイワイと話をしていました。ここはそういうことが許される場所なんだという雰囲気作りをすることを以前から心掛けていたし、学習者も皆分かっていたんだと思います。

いわぬまアイビリーの教室は、長く通っている学習者が多いですね。

そうですね。もう本当は日本語の勉強は必要ないのでは、という人も来てくれています。しばらく休んだり、他の教室に通ったりしていた人が、また来てくれることもあります。「この教室は温かい、先生方も優しい」と評価してくれていて、とても嬉しいですね。例えばは良くないですけど、みんなにとって「行きつけの居酒屋」のような存在なのかもしれません。

震災を経験して、日本語教室や学習者に何か変化はありましたか。

「日本語がもっと理解できていたら心強かったのに」という思いがあったせいでしょうか、震災の後には、もっと一生懸命勉強しなければ、という雰囲気になりましたね。言葉の大切さを身に染みて感じたようです。

今、震災後のいわぬまアイビリーの皆さんの取り組みを振り返ってみて、どのようなことを感じますか。

今いる講師三人もみな長く活動していて、お互いに気心が知れています。そんな関係だから、震災後の安否確認なども、普段の活動の延長のように、ごく自然にそれぞれが学習者のために動いていた、という感じでした。

ただ、過去に他地域で震災があったときに、外国人が情報不足等で孤立したという話を聞いていたので、岩沼に暮らす外国人が困難な状況に置かれた場合は、動くのは私たちしかいないね、という話は震災前からしていました。幸いなことに、今回、外国人だから困ったという話は聞きませんでした。仮設

住宅に暮らす韓国出身の方を訪ねたとき、「仮設の中で取り残されていない？韓国人だからって嫌な思いをしていない？」って聞いたら「ないない。『キムチの作り方教えて』って、言われてるよ。私、仮設のみんなと仲間だよ」という答えが返ってきて、一安心したということもありましたね。他の学習者もその人のところに食べ物を届けたりして、日本人のご主人もとても喜んでいました。今振り返ってみても、皆で助け合っただけでしたが、外国人だから差別を受けたという話は他の人からも聞こえてこなくて、私たちの心配が杞憂に終わって良かったと思っています。

2-4

ニーズに沿った物資の支援と震災体験を共有する会の開催：わたり楽しい日本語講座 沼辺和子さん

震災後に、「わたり楽しい日本語講座」の沼辺さんと八巻さんが学習者のサポートのためにどのようなことをされたのか、お聞かせください。

震災の直後は、とにかく安否確認を急がなければと思っていました。私はガソリンが無くて車で動けないし、電話も通じなかったので、まず、自宅近くにあった避難所に歩いて行きました。そこに置いてある他の避難所の名簿を見たり、他の方が町役場まで行って名簿を確認したりして、「ああ、あそこには〇〇さんがいるんだな」という形で生徒の安否を確認しました。3月末までには全員の安否確認ができて、亡くなった生徒はいなかったのですが、被災した人が大勢いることがわかりました。4月になってガソリンが手に入るようになってからは、本格的に避難所を回って生徒を尋ねてまわり、どんなことに困っているか確認して、必要な物を届けたりしました。避難所で会えた時は、皆とても安心した表情を見せていましたね。

訪ねて来てもらえて、嬉しかったんでしょうね。

そうですね、もう、感情的に「わあっ」ってなっていました。やっぱり避難所での日本語のアナウンスがよく理解できなかったり、自分の欲しい物が遠慮して言えないというジレンマがあったりして、それを誰に言ったらいいかわからないときに、私たちの顔を見て、「ああ、会えてよかった」と安心したのだと思います。避難所の中で緊張した日々を過ごしていたのでしょうね。

沼辺さんと八巻さんのお二人で避難所を訪問していたのですか。

他に被害の少なかった他の生徒たちも一緒に車で動いていました。生徒たちも、他の人の様子が気になっていたんですね。亘理町で6箇所、隣の山元町で2箇所ぐらいの避難所に行きました。

それから、ご自宅で被災した学習者の話を聞く会を開いたんですね。

第四章

はい。避難所に訪ねて行くと、みんな自分の体験を話してくるんですね。親戚がいる人はケアされている人もいましたが、家族との方だけだと、聞いてもらえる余裕も無くて、話し相手もない状況だったのだと思います。だから、とにかく話を聞いてあげていました。手前味噌ですが、やっぱり普段から顔の見える関係だった私たちに会って話ができるというのは、生徒たちにとって大きな喜びだったと思うんですね。

みんなの様子を見て、これは絶対に集まって話を聞いてストレスを少しでも発散してあげなくては、と思いました。やはり避難所ではゆっくり話を聞いてもらえないですし、少し落ち着いて話せる場所が必要だね、ということになりました。一緒に避難所を訪問していた生徒からも「みんなで話したい」という声が上がっていたので、それで四月の半ばから、自宅に生徒たちを集めて話し合う場を設けたんです。月に二回ぐらい、全部で5、6回だったでしょうか。

その会では、日本語の勉強ではなく、それぞれの体験を語るということをしたのですね。

はい、心を開いて話を聞いてあげる、ということをしていました。一回目のときは、料理を作って、いろいろ食べたり飲んだりしながら、あれこれ話をしました。やっぱりあれだけの辛い体験をして、心に抱えているものってすごく大きいですから、それを吐き出すことでストレスが減るということはありますよね。特に原発事故のこともあって、母国の家族はすごく心配していたけど、自分からはあまり不安を与えるようなことは言えないからと我慢していたようで、それを信頼している私たちに話して、少しは気持ちが楽になったようです。二回、三回と繰り返すうちに、次第に気持ちの整理ができてきたように見えました。そのうち、日本語の勉強も取り入れられるようになりました。

支援物資の配布もしていたとのことですが、日本語教室や町の国際交流協会の方々で支援物資を集めて被災した外国人に配っていた、ということでしたよね。

最初に避難所に行った時から、必要な物を一人ひとり確認して届けていました。それから、個人的なネットワークを活用したり、町の災害FMラジオの協力を得たりして衣類などの物資を集めて、自宅に生徒が集まった時に渡すということもしていましたね。八巻さんや町の国際交流協会の方々、被災した外国人に聞き取りをして、自転車やパソコンを配布していました。避難所で一気に物資が配布される際に、本当に必要な物が配られていたかという、そうでもないんですね。私たちは、オムツなどの新生児用品、チャイルドシート、思春期の女の子の下着、高齢者向けのズボンなど、一人ひとりの要望を聞いて、それを集めて届けるようにしていました。自分が本当に必要なものが手に入って、皆さんすごく喜んでいました。やはり個人の要望を聞いて、それに応えるということは誰かがする必要があったと思っています。

日本語教室はどのように再開したのでしょうか。

私の家で集まってみんなで話しているうちに、「日本語をもっと勉強したい」という声が上がったんで

ですね。避難所で周りの日本人が言っていることが聞き取れないというので、もっと勉強しないとだめだよねということになって、それで、お互いの経験を話すだけではなく、少し勉強も入れることにして、日常会話の勉強などを始めました。その後、落ち着いてきて、日本語講座を再開しました。

震災前に教室の会場としていた場所は使えなくなってしまったので、八巻さんが役場に相談して、逢隈の公民館を借りることにしました。長く続けてきた活動なので、役場も場所を探すのに協力的でしたね。再開できたのは嬉しかったのですが、自宅の片づけがある人や、働かざるを得なくなった人は、次第に来られなくなってしまいました。震災前は一生懸命勉強していた人たちただだけに、とても残念でしたね。ですから、再開できたから諸手を上げて万歳ということではなく、複雑な気持ちでした。生活再建が最優先ということは仕方のないことですからね。

沼辺さんたちのなかで、震災を経て日本語教室に対する考え方に何か変化とはありましたか。

特に大きな変化はないですね。安否確認をしたり、震災体験を共有する会を開いたりしたもの、普段の私たちの活動の延長でした。日本語教室を、言葉を勉強すると同時に、その人が思っていることを話せるような場にしてあげたいという考えが開設当初からありました。震災があって、こういう時に彼女たちの話を聞いてあげられるのは私たちしかいないと思っていたので、自宅に集まって話をするということも、自然な流れだったと思います。

でも、今振り返ると、あのような活動ができたのも、普段の関係があったからこそこのことで、信頼関係が無い人には心は開かないと思うんですね。そういう意味で、長い間日本語教室をやってきて良かったな、間違っていないかったな、と改めて感じています。

「わたり楽しい日本語講座」をはじめ、東日本大震災では県内の日本語教室の方々で学習者の支援に奔走されていました。ご自分の活動を振り返って、他地域の日本語教室の方々にお伝えしたいことがあるとしたら、どんなことでしょうか。

そうですね、外国人だからということではないですけど、災害が起きて、何か物資の支援をするようになった場合、ニーズに合った物を渡すことが必要だ、ということのを頭に入れておいていただければと思います。

それから、普段の活動では、やはり人間関係が一番重要なので、学習者と良い関係を築いてください、ということをお願いしたいですね。「教える」というスタンスではなく、話しやすい環境を作ってあげることが大事なのではないでしょうか。文法とかいろいろありますけど、それを教えないから日本語教室じゃないということではなく、来た人が一言でも自分の気持ちを伝えることができる教室であれば、それは成功だと思います。心を開かせてあげる、そういう努力をすることが求められているし、それが震災のような万が一のときに生きてくると思います。

第四章

3 おわりに：災害に強い地域づくりと地域日本語教室

今回インタビューを行った4人それぞれが、安否確認をはじめとして、震災後にさまざまな支援活動を行ってきた。こうしたことが、どれほど学習者(外国人)の支えとなったかは想像に難しく、それぞれの献身的な取り組みに改めて敬意を表したい。

日本語教室という、物理的な「場」は、震災後に施設が損壊したり避難所となったりしたため、震災後数か月は失われていた。私たちが被災地を巡回した時は、どの教室も活動を休止中で、このような時だからこそ日本語教室が求められているのにと非常に歯痒い思いをしたものである。しかしながら、物理的な「場」は一時的に失われていても、そこで培われた「つながり」は有効に機能し、支え合いのための大きな力となっていた。そういう意味で、今回の震災で大きな被害を受けた沿岸地域の多くに日本語教室が存在したということは、幸いなことであると言える。

今回の震災を経験して、私たちは、災害のような有事の際には日本語教室が外国人のセーフティネットとなることに気付いたわけであるが、それに関連して、平時の日本語教室の活動が災害への備えとなるということについても考えてみたい。

改めて言うまでもなく、自助力・共助力を高めることが災害への備えとなるが、外国人と日本人が共に暮らす地域において、この自助力・共助力を高めるのに日本語教室の活動が大きく役立っている。

まず、日本語教室の役割として、日本語習得の機会を提供することが挙げられるが、日本語能力が高ければ、やり取りできる情報量が増え、有事の際に、起きたこと、置かれた状況をより正しく理解することができるし、また、問題解決のためにより主体的に動くことができる。インタビューでも言及されているように、今回の震災で日本語能力が求められる切実な場面を経験し、「震災後は日本語学習に対する意欲が高まった」という外国人も多い。日本人側からのアプローチとして、各種情報を多言語やわかり易い日本語で提供するという取り組みも重要であるが(そして、こうした多様な意思疎通のあり方を試みるのも日本語教室で出来ることの一つであるが)、いつ、どんな状況で被災するか分からない以上、自分および家族の命と安全を守るスキルの一つとして、日本語能力を身に付けるということはやはり必要なことである。

また、地域の日本語教室は、言葉以外にも、防災・減災のための知識や情報を得られる場となっている。以前から全国の日本語教室で外国人向けの防災教室が開催されているが、今回の震災後、こうした取り組みがより活発になっているようである。私たち宮城県国際化協会でも、今回の震災での経験を考慮した内容を織り込み、主催している日本語教室で、あるいは地域の日本語教室との協働で防災研修を行っている。何かが起きた際に情報をやり取りするための言語能力、防災・減災に役立つ知識や情報を得ることは、そのまま自助力の向上につながる。

次に共助力についてだが、日本語教室のもっとも基本的で重要な役割が、地域社会での人間関係を構築することであることが、4人のインタビューからも伝わってくるのではないだろうか。安否確認、生活再建のための物資支援や各種手続きの補助、被災体験を分かち合っの精神的な支え合い、などの多様な「共助」がごく自然に、そして効果的に行われていたのは、普段の日本語教室での活動を通して、顔の見える関係が築かれていたからこそである。同じ地域に暮らす人たちとのつながりを得て人間関係を広げることは、日常生活上の、または何かが起きた際の「共助」の力が向上するというのである。人間関係を築く機会は、特に日本語教室に限られたものではなく、それぞれの置かれた環境によっていろいろと考えられるが(職場、PTA、趣味の活動、自治会活動、普段の近所付き合い等)、日本語能力が限られた外国人にとっては、日本語教室がそのための身近な場所になっていることが多い。また、今回の震災でもそうであったように、外国人が「支援する側」になり、自らが「共助」の役割を担う存在になってもらうためにも、地域社会との接点の一つとなり、日本語能力やさまざまな情報を得る日本語教室の果たす役割は大きいと言える。(今回のインタビューでは詳しく触れていないが、石巻の日本語教室の「元学習者」たちが、震災後に地域の被災者支援の活動に奔走したり、海外出身者の相互扶助ネットワークを立ち上げたり、ということがあった。日本語教室で力を得た外国人が、地域における「共助」のキーパーソンになり得る例である。)

このように、日本語教室は、普段の活動が地域社会のなかの自助力、共助力の向上につながっており、日本人と外国人を交えた形での災害に強い地域づくりの一端を担っているとと言える。言葉を教える・学ぶことだけにとどまらない多様な機能を持ち、それが災害の備えにもなっている日本語教室は、その重要性が広く認識されるべきである。

現状としては、外国人の「散在地域」である本県において、在住外国人を対象とした日本語教室は、行政の施策としての優先順位も低く、市民の中での認識もそれほど高くないというのが実態である。教室が未設置の市町村も多い。また、既存の教室においても、学習者の減少や、支援する日本人側の世代交代といった課題も見られる。しかし、本章で紹介したように、今回の震災では、日本語教室があった地域では、そこが外国人にとってのセーフティネットとなっており、また、平時の活動そのものが、防災・減災へとつながっている。そのことがきちんと評価され、行政の積極的な関与と市民の参画のもとに、今後、地域日本語教室が拡充していくことを期待したいし、当協会としても求められる役割を果たしていきたいと考えている。